

# 身体構成に関する現象学的分析について

——フッサールの『イデーニ<sup>II</sup>』を中心にして——

三村 尚彦

はじめに

脳生理学の進展とともに、「意識」も脳内の出来事として解明できるとする主張が、力を得ている。このような傾向に対して、現象学は、われわれが世界や対象を分節化し、認知するためには「身体」の機能が不可欠であると反論する<sup>[1]</sup>。もし脳内の神経レヴェルのプロセスにおいてすべての心的内容が生み出されるとするならば、脳と各認知に相応する生理的状态を作り出す装置の二つによってわれわれは、現実と全く同じように世界の中で生きることができることになる。けれどもわれわれが世界と関わる場合の意識内容には、身体の媒介によって初めて可能になるものがあることを実際の現象分析を通じて、現象学的思考は明らかにしている。このような点から言っても、「身体」は、現在の現象学において極めて重要なテーマの一つであるだろう。さらに「フッサール現象学」という枠組みだけに限定しても、「身体」が超越論的現象学の核心に、特に主観性という概念の根幹に関わる問題である

身体構成に関する現象学的分析について——フッサールの『イデーニ<sup>II</sup>』を中心にして——

ことは、多くの論者において一致を見ている。それゆえこれまで身体に関して、多くの広範囲にわたる内容豊かな研究がなされてきた。

小論では、その広い問題圏から特にフッサールが『イデーニⅡ』において論じた身体構成を取り上げ、「感覺態」(Empfindnis)という概念と「觸覚」の意義を問い直すことを試みる。感覺態と觸覚をフッサールは、身体構成にとつて根源的な要素であると強調した。このことは研究者の間でも、長らく西洋哲学においては視覚が中心的に論じられ、觸覚が不当に落しめられてきたことをフッサールが明示したと積極的に評価されている。おそらくこれは妥当な解釈であろう。しかし身体構成の根源として觸覚をあまりに強調することは、視覚中心に感覺を論じてきたことと同じ陥穽に入ることになるのではないか。このことをフッサールのテキストや二次文献の解釈を通じて示し、身体構成における「感覺」への適正な理解を得るようにしていく。この考察は単に身体論というトピックにとどまるものではなく、中期フッサールの構成的現象学の分析へとつながっていく射程を持つものとして意図されている。

## 1 「身体構成」という問題

われわれは、まず「身体構成」ということが、なぜフッサールにとつて問題になったのかを確認しておこう。周知のようにフッサールは一九〇五年ごろから「現象学的還元」という方法を構想するに至る。それは認識論的な関心に導かれて、デカルトの懐疑にならい認識批判の抛り所となる地点を求めたからであった。現象学は外的事物の存在指定を信念することなく、超越的指定をエポケーし、その後もなお与えられる所与に基づいて認識の根拠を明

らかにするものとされた。「私は認識を純粹直観的に純粹現象の内部で、純粹意識のもとで研究しなければならぬ」(II, 46)。「イデーニー」の言葉で語れば、現象学は純粹意識という領野の内部で、所与として与えられる感覚与件(実的内容)とそれを生氣づける統握(Auffassung)の働きのよって「志向的对象」(ノエマ)がいかに構成される(sich konstituieren)のかを問うのである。つまり意識を超越した対象が、意識に内在する領野のうちでまさに「意識を超越したもの」という意味として志向されることはいかにして可能になるのかを問題にするのである。知覚を範例に取りながら、いわゆるノエシス・ノエマの志向的分析を通じて、われわれに外的事物という意味が、さらには世界という意味が与えられる(構成される)プロセスを明らかにするのが、超越論的現象学の目的なのである。一九〇七年の講義で、フッサールは事物と空間の構成を論じた。事物が現出するためには、感覚与件として色が一定の形に拡がることよって、その形態が示されることが必要である。しかしながら事物は二次元の平面図形ではなく、三次元の空間事物であり、さらにそれをとリまく空間も存在する。空間事物を構成するためには、運動の契機が生じなければならない。運動に関しては、事物が動いているのか、知覚者が動いているのかを区別される。この時、フッサールは「キネステーゼ」(Kinasthese)が関与しなければ、空間事物が構成されないとする(vgl. XVI, 161)。キネステーゼとは、客観的な空間内を存在するものとして信念された身体が動くときに感じる感覚のことではなく、現象学的還元後の意識所与のうちで自己の何らかの運動と同時に与えられる「運動の感覚」のことである。自己のキネステーゼに対応する形で事物の現出像が変化するならば、知覚者が動いているのであり、キネステーゼの変化が感覚されていないのに事物の像が変わる場合には、事物が運動しているということがわかる。このようにして事物構成にとつて、キネステーゼという身体器官の運動に伴う感覚が問題となり、フッサールは身体というテーマに至る。身体も物理的事物である以上は、外的事物構成の対象であるが、また同時に感覚器官として

キネステーズを担うものでもある。身体がもし単なる事物として構成されたのでは、それは人形と変わらなくなってしまう。空間的に知覚された物体が、目の前の机や本とはあるいは人の身体に似た模型とも違ってまさに身体であると、事物とは異なつた構成によつて与えられるのである。それゆえフッサールは『イデーⅡ』において、「自然としての人間」(Mensch als Natur)の構成的考察の一部分として身体の構成を論じることになる。

## 2 感覚態と二重感覚

『イデーⅡ』では、超越論的意識によつて構成される対象は、それぞれの本質を根拠にして一定の対象領域に属することになり、それがその対象を扱う学の領域となつているとする領域的存在論が構想される。身体は、生命的自然(animalische Natur)という領域内の対象としてその構成が論じられる。以下で『イデーⅡ』の記述を概観しながら、フッサールの「感覚態」「触覚における二重感覚」に対するわれわれの見解を明らかにしていく。

見ることと触れることが同時にできる身体物体の部分をその他の事物と同様に、われわれは見、触ることができ。ちょうど目の前の机の上にある箱に右手で触れながらその箱を見るところと全く同じように、机の上にある左手に右手で触れる。しかしそれはまた、箱の知覚とははつきり異なる事態でもある。箱を触っている場合、私には箱の表面がすべすべしているとか固いといった箱の特性を告知する触覚(Tastempfindung)が与えられ、それを統握する。一方、手で手を触っている時には、たしかに左手の表面がすべすべしているとか指の節の部分はこつこつしているなどと左手の表面の触覚的特性が統握される。この時、触っている右手は知覚器官であるが、触られている左手は、箱と同じように物理的な事物に過ぎない。「しかしながら私は、左手を触りながら、左手にもま

た一連の触感覚を見いだす。その感覚は左手に局所化される。けれどもそれらの感覚は、物理的事物である手の粗さ(ざらざらしている具合)やなめらかさ(すべすべしている具合)のような特性を構成しはしない」(IV, 145)。括弧内は引用者による補足。物理的な事物の特性として統握されていたのは、左手の表面の様子を告知する感覚であったのであるが、同時に生じるいわば「触られている」という感覚は、左手の特性を告知しないの言うまでもない。この左手に局所化された(触られているという)触感覚は、物理的事物の規定を豊かにするのではなく、むしろその左手を身体にするのであり、左手は「感じるもの」になるのである。左手に局所化される「触れられている」という触感覚こそが、左手を、箱のような物理的事物を越えて、身体とするのである。同様に触っている右手にも、逆に左手によって触れられているという触感覚が生じることによって、右手は物理的事物であり、かつ感じる身体であるというように与えられる。「身体はしたがって根源的には二重の仕方で構成される、一方では身体は物理的な事物、質料であり、色、なめらかさ、固さ、あたたかさなどのリアルな特性がそこへと入り込む延長を有している。他方では私は、身体の上において、身体の中において感じるのである」(IV, 145)。身体と他の物質的事物との物理的な関係において(触れる、ぶつかると)生じてくる出来事は、身体にとって自己の空間的位置(たとえば、左手の甲の部分、背中など)に局所化される形で感じられる。この感覚をフッサールは「感覚態」と呼び、そこに身体が身体として構成されることの特徴的な事態を見いだしている。

ここでわれわれは、感覚態に見出される「二重の仕方の構成」という主張との関係が、今一つ不明瞭である。「二重感覚」(Doppelempfindung, IV, 147)の、身体構成における意義について考えていく。二重感覚とは、フッサールの定義では、「ある身体部分が別の身体部分にとって、同時に外的客体である場合に」持つ感覚である。端的に言えば、手で手に触れる場合の感覚である。よく知られているようにこの事態は現象学にとって特権的な事例と

なっている。なぜならそれこそが身体を根源的に構成する場面だからである。しかしここでわれわれは「二重」ということと、身体の「根源的な構成」ということに対しての理解に慎重でなければならぬ。感覚が二重であるとは、対象の特性に対応する感覚と何らかの位置に局所化される感覚態（クレスゲスの言葉では、アスペクト与件と位置感覚<sup>3</sup>）の二つが、同一の感覚によって担われているという意味ではない。もちろんこの二つの機能を一つの感覚が有しているのは全くの事実であり、この点で確かに二重感覚と呼ぶことができよう<sup>4</sup>。けれどもこの意味でならば、フツサールの定義に反して、二重感覚は外的事物に触れるという経験であればあらゆる場合に生じることになる。箱の表面がざらざらしているという感覚は、箱のアスペクト与件であり、同時に触っている私の右手の指の一部分に局所化されるからである。むしろフツサールの言っている「二重」は、アスペクト与件かつ位置与件となる感覚（二重の統握を被る同一の感覚）が、知覚器官としての身体と物理的事物としての身体との双方に対して構成的に働いているということの意味しているはずである。そうでなければ、フツサールの付加した「ある身体部分が別の身体部分にとつて同時に外的客体である場合に」という条件が何の意味も持たなくなってしまうだろう<sup>5</sup>。結局、自己の身体への接触という場面では、通常の事物に触れる場合の感覚統握を基点にして表現すれば、同一の感覚が四重の機能を担っていることになるであろう。一つの感覚Eが右手のアスペクト与件と左手の感覚態であり、かつ同時に左手のアスペクト与件と右手の感覚態なのである。

ではわれわれがこれほどまでに事態を詳細に確認し、フツサールの術語「二重感覚」をわざわざ四重感覚とも言えると解釈し直す（ただしそれこそが、フツサールが、本来意図していたことであると思われる）ことによって、何が明らかになってくるのであろうか。それは、前述の身体の根源的構成という概念の持つ射程であろう。

自己接触の場面の意義を身体構成に求める議論において、例えば次のようなものがある。「フツサールは触覚に

よる身体構成について語る。触れる手は触感覚を持つものとして現出する。なめらかさが対象に帰属するものとして現出すると同時に、しかし注意の向きを変えるとその手は、なめらかさの感覚を現出する指先の上にもっているのである。フツサールのこのような言い方に対して、現出する指先と言えば、すでに指先が構成されていなければならぬことになる。したがって、『手が手に触れる』という現象においてこそ、事物であると同時に局所化された感覚の担い手である身体は、根源的に構成される。同一の触感覚は、統握の交代において現出している右手左手に局所化されたものとして統握される<sup>6)</sup>。この議論はおおむね承認できると思われる。事物であると同時に局所化される感覚の担い手である身体がまさに構成されるのは、自己接触においてでしかありえないからである。しかし前述のように、事物への接触においてすでに指先が構成されているということを理由に、自己接触を身体構成の根源的場と主張する点には、疑問が残る。手が手に触れていても、統握の交代によってそれぞれが構成されるとしている以上、一方の統握が生じている時には、事物を触っている時と同じく指先や手がすでに構成されていることになる。もちろん統握は相互に反転し合うことで、すでに構成されているという事態には陥らないとも言えるかもしれない。しかし原理的に考えれば、反転が開始される時にはいずれか一方がまず統握として成立していたのであり、その時に感覚が局所化される身体部分はずでに構成されていたということになるであろう。したがってわれわれは次のように理解しなければならないはずである。箱に触れる時、感覚態によって構成されるのは、知覚器官としての身体、あるいは身体の知覚器官の側面だけである。感覚態は身体に対して二重に機能しはしない。しかし身体は知覚器官であると同時に事物であるがゆえに、そのことがまさに一つの経験において与えられるのが、言い換えれば、感覚態が身体に対して器官かつ事物の構成として二重に働くのが、身体部分と身体部分の接触という場面なのである。その意味で感覚態は根源的な構成の場と言えるであろう。だがさらにわれわれはフツサールをも越えな

ればならないように思われる。フツサールは「注意の向け変え」について語っている。前述の見解では、統握の交代という事態である。しかしこれでは身体は知覚器官でもありかつ事物でもあるとは言えても、同時に両者であるとは言えないだろう。われわれは、例えば服のサイズ合わせをする時には身体の事物の側面を優先して捉えているはずである。また何かを観察している時には、身体は観察対象の知覚器官という側面が中心である（ただしその機能自体は背景に退いているが）。けれども多くの場合ははっきりとどちらとも分けられない形で身体を意識している、あるいは感じているだろう。このはっきりしない状態こそが身体特有の感じ方のはずであり、それは統握ということに先立っているようなものである（身体の根源的構成とは、このようなあり方をする身体を構成することではないだろうか）。われわれが先に確認した、「四重感覚」という事態は分析的には四つの要素に区別することが出来ても、実際はある感覚態が一気に四重に働いているのであり、それだからこそわれわれは、身体をまさに身体特有の性格づけ（事物でありかつ知覚器官であるというはつきりしない状態）をもつて有することができるのである。ただしわれわれがこのように捉えられるのも、フツサールがその反省的な省察を行ったからであることに留意するならば、「統握」から遡及的に事象に迫っていくこと自体が責められるわけではないであろう。必要なのは、分析の後、再び事象に即して再構成的に総合することと、それでもなお、われわれの思惟を逃れていくものへの適切なアプローチの仕方を絶えず模索することだろう。フツサールを越えていくことの意味もそこにある。

二重感覚とは、二重に統握される感覚が器官としての身体と事物としての身体の構成の働きを担うという点で四重感覚と呼ばれてもよいということ、身体のまさに身体固有なあり方を根源的に構成するとはどのようなものかということが、示された。しかししづれにせよ、フツサールは身体構成にとつて必要なは感覚態であり、自分で自分に触れる経験であるとしていた。「身体はそのようなものとして根源的には触覚性においてのみ構成される」(IV、



150)。次にわれわれは、触覚に基づく身体の根源的構成という事態を検討しなければならない。

### 3 身体構成と触覚

フッサールは『イデーニⅡ』において触覚の働きの根源性を、次のような思考実験によって論じている。

われわれの見ているすべての事物は、触りうるものであり、そのようなものとして身体への直接的關係を示しているが、ただしそれは事物の可視性によつてではない。単に眼だけをもつた主観(Dios augenhaftes Subjekt)は、決して現出する身体をもつことはできないだろう。その主観はキネステーゼ的な動機づけの働きにおいて(この動機づけを身体的に統握することはできないだろうが)身体の事物現出を持ち、リアルな事物を見るであろう。単に見るだけの人が自分の身体を見る、とは言われないであろう。というのは身体としての特有な特徴がその身体には欠けているのだから。(IV, 150)

この引用を受けて、「触覚的身体は、フッサールにとつていわば主観が主観自身を振り返り、主観が現実の私として与えられるための根本要件だったのである」<sup>(2)</sup>と解釈されるのが一般的である。触覚的身体を重要視する論拠は主に先のフッサールの引用から抽出される三点にあると思われる。

1、眼だけの主観は、自分の身体を見てもそれを自分の身体とすることはできない。なぜなら眼だけしか持つていないので、感覚態が生じることはないからである。手が手に触れるのと同様の仕方では眼が眼を見ることが

不可能だからである。それゆえわれわれは例えば、動く手と動かない手袋との違いを識別することは出来ても、手を特に自分の手、つまり自分の身体として関係づけるべき理由を何ら持たないのである。あるいは機械仕掛けで動く手のモデルと、実際の手を区別することはできない。したがって身体の特有的特徴である感覚態を生ぜしめる触覚に身体構成は負っていることになる。

2、例えば、彼方の山と手前の森との遠近関係にしても、眼だけの主観には自分にとつての関係とはならないはずである。そのような主観なら、一枚の絵を見るかのようにただ眺めているだけであろう。しかし、現実にはわれわれは、山があちらに見えるということは自分から離れてあるということであり、森がこちらに見えるということとは自分に接近してあることだということを知っている。それはなぜか。「フツサールによれば、それこそは、身体、もつと正確に言えば触覚の働きによるのである」<sup>(8)</sup>。

3、そもそも眼だけの主観が有する唯一の感覚器官、眼が身体の一部になるのは、それらの感覚が触覚によつてどこそこの感覚という形で身体の特定位に位置づけられるからであり、したがって間接的な仕方なのだ、とフツサールは力説している。「視覚的身体も局所化に関与している、なぜなら視覚的に構成された事物と触覚的に構成された事物が合致するのと同様に、視覚的身体と触覚的身体は合致するからである。そのようにしてある感覚を持つ感覚する事物(身体)の理念が生じるのである。——中略——それがすべての感覚一般に対しての、またそれにおいてはいかなる第一的な局所化をも持たない視覚的、聴覚的感覚に対しての前提なのである」(IV, 152)(括弧部分は引用者の補足)。思考実験で想定された「眼だけの主観」というものすらも、触覚的に身体が構成されることによつて初めて語られるものなのである。

これら三点は、いずれもフツサールの記述に忠実な解釈であり、多くの論者によつて指示され、フツサールの身

体論の成果として承認されているものである。しかしフッサールの思考実験とそこから引き出された三つの論拠をもう一度事象に即して考えてみるならば、身体構成における触覚の意義に関して、フッサールの語ったことが再考の必要性を持つてくると思われるのである。

まず『イデーⅡ』の一五〇頁からの引用部分において、われわれは「眼だけの主観」の直前の一文をよく吟味しなければならぬはずである。というのはこの部分が思考実験の前提をなしているからである。「われわれの見ているすべての事物は、触りうるものであり、そのようなものとして身体への直接的関係を示しているが、ただしそれは事物の可視性によつてではない」は、今問題にしているのは触覚であるということを宣言している。事物の触られうるという性格は、身体が触覚器官であるがゆえに直接的関係を示されるのであつて、事物が見られうるということによつてであるはずはない。したがつてわれわれは逆方向の前提を立てるならば、フッサールのとパラレルな議論が成り立つはずである。すなわち「われわれの触つていないすべての事物は、見られうるものであり、そのようなものとして身体への関係（触覚と同じ意味で直接的とは言えないだろうが、なぜなら視覚は遠感覚だから）を示しているが、ただしそれは事物の可触性によつてではない」と。それゆえここでは、なんら事象的に触覚の方が視覚よりも根源的であるとする根拠は示されていない。たしかに触覚は身体に直接ふれあう点で、視覚より身体に対する関係が根源的であるという反論も予想できよう。しかしこの反論は、感覚の性質（近感覚と遠感覚）の違いと身体関与とを混同していると思われる。そのことを明瞭にするためには、1の議論（眼だけの主観は感覚態を持ちえないから、身体を知覚することはできない）を考慮しなければならない。

ではここで「眼だけの主観」というのは一体何を意味しているのか。それが手も足も上半身も顔も持たない、まさに眼しか持たない主観だとすれば、物質的事物としての身体とはまさに眼球に他ならなくなつてしまうから、キ

ネステーゼ的動機づけの働きで自己の事物現出（レースエクステンサとしての身体の現出）を持つということ自体意味がなくなるだろう。したがって「眼だけの主観」は普通の意味で身体を持つているが、感覚器官としては「眼」しか持たない主観のことであり、未公開のD草稿で言われている「視覚的還元」<sup>9)</sup>（視覚的に現出する領野と視覚器官のみを考察する態度へと還元すること）を被った主観のことでなければならぬはずである。この主観はたしかに「身体」を見ることもまた経験することもできないはずである。できるのはレースエクステンサとしての身体物体を見ること、ないしはそれを動かし（ここでキネステーゼはいかにして語られるのか。おそらくフッサールの想定ではキネステーゼは覚知しているが触覚がない身体ということになる）、同時に動いている物体を見ることだけである。それゆえ1は正しい。しかしこの思考実験は、視覚と触覚の機能の違いを説明することはできても、触覚の機能が身体構成において、視覚に対してより根源的であることの根拠を提示するものではない。なぜなら眼だけの主観が身体を持ってないとされたのは、そもそも眼以外の身体部分がレースエクステンサではなく知覚器官としての身体になるのは触覚においてのみだからであり、すなわち感覚態が、（触覚的に）局所化されるという理由に基づいている。視覚的還元（眼だけの主観の想定）は、そもそも触覚を捨象して身体（眼以外の身体部分）を物にする操作に他ならない。例えば、逆に触覚的還元を遂行して、触覚しか持たない主観を考えるならば、その主観はいっさいの視覚像を有することができないのと同時に、身体としての（知覚器官としての）眼を持つこともできないはずである。その場合にあるのは物としての眼だけであろう。したがって感覚の違い（われわれの例では視覚と触覚）は、それに対応する知覚器官の部位（眼と身体の大部分）の構成と関係しているのであり、部位の違いを考慮しない時のみ、触覚の身体関与が視覚よりも直接的であると主張できるのである。けれども知覚器官の部位という観点を導入すれば、触覚が一見、身体構成にとって根源的に思われるのは、身体の大部分は触覚器官である

からだということになる。

対比的に触覚と視覚による身体構成を示してみれば、以下のようになるだろう。触覚に対応する感覚器官「右手」は、自分の身体はどこか、例えば同じく触覚器官である左手に触れることで左手を事物として構成し、同時に左手に何らかの感覚態が生じることから知覚器官としての左手が身体として構成される。このことは全く同じ行程によって右手にも起こっている。事物であり同時に知覚器官（触覚器官）である身体が構成される。一方、視覚器官「眼」は、見えている身体部分を事物として構成する。しかし見えている部分が、同時に身体として構成されることはない。眼がその部分に対して感覚態を生ぜしめることはないし、見られている部分が見返すということも起こりえないからである。ではこの場合には、単に事物が構成されているだけなのであろうか。しかし事物を見るという体験にやはり身体の一部である視覚器官「眼」が関与している以上、身体が構成されていると考えべきであろう。眼が事物の視覚像を提供するという形で機能すること、事物が与えられると同時に身体の器官として構成されるのである。まぶたを閉じると視覚は遮られる。その他の事物や手で眼を覆っても同じである。まぶたを開けると、あるいは眼を覆っている手をどけると、再びわれわれは視覚像を手に入れる。眼を遮ることに関係していない身体部分を動かしても、視覚像は同じく開かれないままである。したがって視覚像と眼が関係していることに気づき、視覚像がわれわれに与えられるのは、眼によってであることが知られる。この時、眼は「視覚に関して機能している器官」として構成されるはずである。知覚器官の構成とは、その機能が發揮されている際に起こるのである。触られている左手も知覚器官としての身体として構成されるのは、「触られている」という感覚態が触覚的に局所化されることによる場合でも、同じ説明が妥当する。したがって身体が器官として構成される要因は、その身体部分が知覚器官として現に機能しているということに求められなければならない。

ここで次のような二つの反論が予想される。一つは、視覚に対して眼が機能していると知る際に、われわれはやはり触覚に依っているのではないかというものである。つまり眼球を動かす時に、まぶたの裏側と触れ合っているその感じや眼を閉じる時のまぶたの感触などがあるからこそ、眼が働いていることがわかるのではないかという反論である。もう一つは、身体の器官を各部位に限定して考えることは、真の生きた身体を捉えることにはならず、また日常的によく出会われる共通感覚的なものと身体との関わりへの考察を閉じてしまうのではないかというものである。前者の反論は、「感覚に対応する身体の器官」という観点への誤解から生じている。まぶたに生じる触覚が眼球に対して行っているのは、その感覚態を通じて眼球の位置を確認しているだけである。仮に眼球がどこ別の身体上の位置に付いていても、もちろんそれで視野などの変化やそれによる心理的精神的変様も生じるだろうが、視覚器官であるという点には何の変化も及ぼさなはずである。したがって眼が働いているのは、あくまでも視覚像を結び、提供することによって知られるのである。後者の反論は、或る意味で全く正当なものであると思われる。ただわれわれの主張していることは、その反論が言い当てていないということである。視覚は眼にのみ、聴覚は耳にのみその受容を求めているとすれば、肌で感じられる色や目で味わう味覚というものは考えられなくなってしまうだろう。われわれの主張の感覚の部位への局在論という側面は、「態度」(Einstellung) という概念を考慮に入れば理解できる。われわれが扱っている身体構成は、フッサールの枠組みと同じく「自然主義的態度」(naturalistische Einstellung) において出会われる身体のそれである。自然主義的態度とは、自然科学の対象領域を構成する時の態度である。<sup>12)</sup>したがって少なくとも生理学的な身体へのアプローチなどでは、視覚において色を与える感覚器官は眼であり、味覚の器官は舌なのである。よってわれわれの分析対象である「態度」が、先の反論に該当する領域を排除しているということなのである。ただし自然主義的な態度にあっても、感覚の協働といった事

態は見いだされる以上、その際の身体の機能や働きを考察しなければならぬであろう。<sup>18)</sup>

したがって眼だけの主観は、眼を知覚器官として構成することはできても、身体の大部分が触覚器官である以上は、その部分を器官として構成することができないのは当然なのである。しかし同じ理由で、触覚だけの主観は、身体の大部分が触覚器官であるのではとんだ部分を構成することはできるが、視覚器官としての眼やその他の器官（耳、鼻、舌）を構成することはできないであろう。フツサールの触覚が身体構成にとって根源的であるという叙述は、器官の機能というわれわれの論点から言えば、質的なものではなく、単に身体の大部分が触覚を司っている器官であるという理由において言われているにすぎないのである。

2 に関しては、身体が身体として構成されなければ「方位づけ中心」が構成されないということを根拠にしていると思われる。しかしこれも前と同様に、フツサールが想定した事態に忠実であろうとすれば、それほど簡単に「方位づけ中心が構成されない」とは主張できない。ここでは眼だけの主観にとつても、キネスターゼに対応して腕や手の運動は物質的事物のそれとして記述されうるとされていた。そのような主観であつても自らの足を用いて（彼自身には自らの「身体としての足」は欠けているだろうが）歩行することによつて、視覚像がキネスターゼ的経過に応じて変化し（ただし、事物としての足は、主観の意志によつて動かされるのではなく、キネスターゼ的動機づけに勝手に連動しているとなるのだが）、視覚的空間が構成されるはずである。もちろんこれがすぐに客観的空間と同一でないのは当然であるが、視覚的領域であつても空間である限りでは三次元のパススペクティブが与えられており、彼方の山と手前の森との遠近関係がその主観にとつての關係であることを意味づけるには、十分な空間である。対象と主観の距離に関する『事物と空間』でのフツサールの記述がこのことを傍証しているだろう。「距離に関して、ここでは客観的に対象が遠くにある、近くにあるということが問題になつており、対象は身体が世界に

組み入れられている知覚者、私のうちにその関係点を獲得している。詳しくは、この関係点は身体全体ではなく、むしろ身体の見られない部分に置かれておるのであり、頭部のどこか、眼の、あるいは眼の背後のどこかに置かれているのである」(XVI, 227f. 強調は引用者)。フッサールの思考実験においては、知覚器官として身体と呼べるものが眼だけであると想定されていたのだから、眼が世界に組み入れられ、その中に対象との関係点が置かれてあれば、距離が生じると言えるのではないだろうか。したがって2のように言うためには、厳密な意味での自己身体統覚が方位づけ中心の構成にとつて不可欠なることを示さなければならぬ。換言すれば、遠近関係の把握は統覚の働きによるという主張を維持するには、感覚器官および同時にリースエクステンサである身体を欠いた眼だけの主観を議論の端緒にしてその主観では空間が開かれないということを提示しなければならない。けれども2のような主張が生じるのは、おそらくは「身体」という語の適用範囲の相違による。眼も知覚器官である限りは、身体の一部であることに変わりはない。視覚や聴覚に障害がある場合も、「身体に障害がある」と一般に言われるはずである。それを身体という言葉で、腕や脚、上半身などの感覚器官に限定して理解するがゆえに、統覚の優位を強調し過ぎるという結果になってしまうのだらう。

3の主張は、すでに1の論点の議論において触れられたので簡単に述べるだけで充分であろう。「眼が感覚器官として身体の一部になるのは、それらの感覚が統覚によってどこそここの感覚というかたちで身体の特定部位に位置づけられるから」であらうか。視覚感覚は統覚によって顔面の特定の位置に局所化されるのだろうか。そこで局所化されているのはまぶた(あるいはまぶたを通して眼球)が感じている触れられている感覚態のはずである。この感覚態がなぜ眼を視覚器官として身体に局所化することができるのか。この場合統覚によってあくまでも眼が器官として局所化されると主張するとすれば、その統覚は眼球のキネステーゼとともに生じているまぶたの内側との接



触になるだろう。視覚および感覚器官としての身体が構成されるには触覚だけでは不可能であると思われる。

#### 4 身体の二重構成に関する補足

われわれは、前節3の三点に即して、フッサールの触覚の身体構成における優位という見解の問題点を指摘した。なおもう一点、補足的にわれわれの見解を展開していく。というのは、われわれの今までの議論は、知覚器官としての身体構成のみを扱っていた。しかしフッサールは、身体が事物であると同時に器官であるというのを一気に与える事象として、自己身体接触による二重感覚を特権化していた。そして視覚では「二重感覚」は生じないとされていた (Vgl. IV, 148)。したがってたしかに知覚器官として身体を構成するには、各器官の機能が発揮されるということが必要であると言えるかもしれないが、それと同時に事物であるという身体独特の性質を体現する形で、構成が行われるのは触覚であり、これは視覚では起こり得ない。それゆえやはり触覚の方が視覚よりも根源的であるという見解が生じるからである。

なるほど視覚では、器官かつ事物という身体の特性を構成することは不可能なように見える。視覚での器官は眼であり、眼は眼を見て事物として構成することはないからである。それどころか、眼以外のいくつかの部分に関しても同様である。すなわち自分の顔や背中などは（もちろん器官として構成することは視覚にはできないが）、事物として構成されるために視覚的に呈示にもたられられることはない。とすれば、上記のわれわれへの批判は妥当し、やはり決定的に触覚と視覚は区別されるべきであるかのようにある。けれども触覚においても、いつも器官と同時に事物であるという仕方、身体が構成されるわけではない。つまり自己身体接触ということが、身体の機構上不

可能な部分があるからである。たとえば身体の柔軟性が乏しい人は自分の背中の或る部分には触れることができない。また食べ物や飲み込みのときや、医療上の処置としてファイバースコープのようなものをのどに通される場合、当然何らかの感覚態を持つが、これを自分の触覚器官（指や手など）において作り出すことはできない。これらの部分は感覚態によって触覚器官としては構成されるが、触覚的に事物として構成されはしないし、され得ない。フッサールが「身体は注目すべき不完全に構成された事物」(IV, 159)であると述べる時、それは文脈上、視覚に對してのことなのだが、われわれは触覚にまで拡張して解釈することが許されるだろう。もちろんこれらの不完全性は全くの事実的なことであつて、手と手の場合のように全き身体構成が実現される場合がある以上、問題にならないという再反論が生じるだろう。けれども触覚構成の不完全性が事実なのであれば、視覚構成の不完全性も全く事実性に依つてゐるはずである。われわれの両眼球の位置が互いを見つめ合えるように配置されており、また顔や背中也見られるようになっていればと、想像するのと同じであらう。これらの相違は、感覚や器官の原理的な違いではなく、身体という事実に基づくものである。したがつて原理的、権利的に触覚が、視覚よりも根源的に身体構成に對して働いてゐるとは言えないであらう。

以上、『イデーニオンⅡ』の身体構成の記述からフッサールの触覚の扱いを検討し、従来強調されていた視覚との差異が、両者の本質構造に依拠しているものか、前者は身体構成にとつて原理的に優位を持つてゐるのかという問いに否定的に答える可能性を描き出してきた。

## 5 身体構成の再編

最後に本考察によって示されたことから、身体構成という問題はどのような形態を取るべきかを明らかにしている。まずわれわれの意図は、フッサールの身体構成論を根底から覆すことにあるわけではない。右記の主張に従つても、やはり身体の大部分が触覚器官であるということと、事実性に立脚しながらも器官と事物の二重統握を許すのは触覚だけであることは争えないだろう。したがって分析が触覚を中心に進められていくことは問題はない。しかしそれを強調しすぎることは、その他の感覚器官を構成する際に、まさにその器官を生き生きと働かせることが必要だということを忘れさせる結果になるのではないだろうか。さらに視覚や聴覚は、触覚に基づけられて構成されるとするのは（もちろんフッサールは還元主義を取るわけではないだろうが）、言い過ぎではないだろうか。眼を視覚器官として働かせること、耳を聴覚の器官として傾けること、これらは全き身体を構成しようとする場合不可欠なのであり、この機能面を考察に引き入れることは、事物構成が成立するためにはキネステーズが働くことによつて地平を開くことが必要であるということと関連しているのである。各器官が生き生きとその機能を発揮させていることに注目すれば、単純に何かを見る、触れるという体験であつても、われわれの身体がその各機能を様々な仕方で絡み合わせるによつてはじめて、成立していることに気づくはずである。前述のようなウエイトトレーニングの例や、単に何かを見る場合に、多くのキネステーズとともに首、上半身、脚など全身が、動員されているのである（ここまで至ると、われわれの見解をより広い考察の射程を獲得するために、越え出ていかざるをえないだろう。つまり身体構成におけるその機能発揮を強調すれば、視覚器官は眼だけではなくなつてしまふから

である。ただしこのことに気づくためには、われわれの議論がなくてはならなかったのである。さらに身体の協働という事態を受けて、視覚にも二重感覚があると言えるという見解もある。むろん見るといふ行為に脚が参与しているからといって、脚が眼になるわけではない。厳密な意味で「見ると同時に見られる」という事態があるはずもないが、一種比喩的な意味で視覚に二重感覚を認めることは、積極的な意義を有していると思われる。見ると同時に見られる身体とは、自然科学が対象とするような身体ではなくなり、主観にとって価値的な意味を持った自己というあり方をするものであろう。前述のように、われわれの身体構成分析の態度もたしかに自然主義的態度にある身体を扱っていた。しかしそこでわれわれは、「人格主義的態度」(Personalistische Einstellung)<sup>17</sup>において捉えられている身体に逢着する。このような態度にある身体の機能を主題化することは、本稿の冒頭で述べていた脳科学に対して現象学独自の意識分析(主観性の分析)を開くものとなるはずである。すなわち身体は、単に外界の情報を得るための器官ではなく、同時に身体が働くことで自己の周囲世界に意味を与えるものである。われわれにとって原初的なのは、自然科学が解明する神経レベルで説明される意識の認知様式、思考様式ではない。これは、人格的な意味において世界と関わっている態度からの抽象によって得られたものにすぎない。この次元が明らかにされてこそ、われわれの世界との関わりが本当の意味で知にもたらされると言えるであろう。

したがって本考察を通じて、自然主義的態度にある身体を現象学的に構成するという事態を事象に即し、再考してみることによって、身体構成にとっては各感覚はそれぞれ等しく根源的であり、むしろ各感覚器官が機能していることが重要視されなければならないということを明らかにした。そしてこのわれわれの主張は、身体が周囲世界との関わりの中で機能していることを人格主義的態度のうちで考察しなければならぬこと<sup>18</sup>、また身体がそのように異なる態度を踏み越えて捉えられるのは、身体の機能が自然主義的、人格主義的双方に複合的

に働いているからであるということ、このような身体を記述にもたらすことは、現代の生理学的心身論に対して現象学的観点の有効性を示すように思われること、といった今後展開されるべき課題を示している。これらを論ずるには稿を改めなければならぬ。

註

フッサール全集(Husserliana)からの引用は、慣例に従い、巻数をローマ数字で、またページ数をアラビア数字で示して、本文中に直接挿入した。書名は以下の通りである。

Bd. II: *Die Idee der Phänomenologie. Fünf Vorlesungen*, hrsg. von W. Biemel, 1950.

(立松弘孝訳『現象学の理念』みすず書房、一九六七年)

Bd. IV: *Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie. Zweites Buch: Phänomenologische Untersuchungen zur Konstitution*, hrsg. von M. Biemel, 1952.

Bd. XVI: *Ding und Raum. Vorlesungen 1907*, hrsg. von U. Claesges, 1973.

- (1) 村田純一「意識 その科学と現象学」『知覚と生活世界』東京大学出版 一九九五年を参照。
- (2) 事物構成にとつてのキネステーズの役割は、単に事物の運動の知覚を可能にするということに止まらず、受動的な世界構成という次元にまで及んでいくものであるだろう。

(3) Vgl. U. Claesges, *Edmund Husserls Theorie der Raumkonstitution*, Den Haag 1964, S. 64

(4) 正確には「このような時フッサールは二重統握(Doppelauffassung)と5言5方を用いるが。Vgl. IV, 147

- (5) ここでは正確を期するために、いささか長くなるが該当箇所を引用しておく。「触覚的領域においては、われわれは触覚的に構成される外的客観と第二の客観、身体を持つ。身体は同様に触覚的に構成されるのであり、例えば、触れている指を、さらには指に触れている指を持つのである。ここにはしたがってあの二重統握が存している、つまり同じ触覚が、外的客観の徴表として統握されかつ身体客観の感覚として統握されるあの二重統握が。ある身体部分が別の身体部分に

身体構成に関する現象学的分析について——フッサールの「イデーⅡ」を中心にして——

とつて同時に外的客体である場合に、われわれは二重感覚と（おのおのの身体部分がその感覚 seine Empfindungen を持っている）物理的客観として的一方と他方の身体部分の徴表としての二重統握を持つ（IV, 147）（一）内のフツサールの言い方がわれわれの記述を根拠づけるであろう。左手と右手にはそれぞれ二重に統握される感覚があると言われているのだから。

(6) 細川亮一「フツサール現象学における身体」『フツサール現象学』編者 立松弘孝、勁草書房、一九八六年、一九六頁参照。なお本文は要約して引用している。

(7) 滝浦静雄『自分』と「他人」をどうみるか』NHKブックス、一九九〇年、六八頁参照。

(8) 同書、六四頁以下参照。

(9) Ms. D10II(1932), S.3, zitiert nach Claesges, a. a. O. S. 58

(10) このことは聴覚、嗅覚、味覚にも当てはまるはずである。触觉によって耳を構成したとしても、つまり耳たぶが何かに触れば、感覚態を持ち触觉器官として与えられることにはなるが、音を聞きとる器官としては構成されはしないということである。

(11) よく言われる例では、「暖かい色」「白けた雰囲気」などの表現によって示されるものを考えればいいであろう。

(12) 『イデーニⅡ』の身体分析は、自然主義的態度という価値述語や実践述語を捨象して「単なる事象」としての自然を見出す態度において行われている。「自然としての人間」という『イデーニⅡ』三五節の表題が、そのことを明瞭に表している。

(13) 例えば、ウエイトトレーニングなどで、負荷をかけている筋肉部分を見ながら運動をすると効果に差が出るという報告がされている。このケースなどは、視覚器官である眼が、自分の腕などを単に事物として構成しているのにとどまらない機能を有していることを示していると思われる。

(14) 前述の滝浦論文においても、同様の混同が見出される。フツサールの「眼だけの主観」をウイトゲンシュタインの思考実験における「遊離した眼」と同じであるとしているからである（六四頁参照）。遊離した眼とは、一個の眼球だけを残して、身体他の部分を取り去り、さらに眼球は動かさず、透明であるとしたらどうなるかという想定のことであり、ウイトゲンシュタインは、そのような眼は、「自分をとりまく空間の表象」、世界を持つことができなかつた。フツサールは、器官が眼球だけの主観を考えているので、両者には差異が認められる。

(15) 事物構成の際に、キネステーズは事物現出の地平を開く働きを持つている。キネステーズは、「私はできる」という意識

と絡み合うことで生じるはずであり、現実化可能であるが行われていないキネステーズに対応する事象像は、未規定的な形で志向されている。この志向が地平的に現勢的なキネステーズにまわりつくことによって、事物は構成される。

(16) 木下喬、「視覚と触覚」新岩波講座『哲学9』岩波書店一九八六年、参照。

(17) 人格主義的態度とは、端的に言えば、われわれの日常的な態度である。「われわれがお互いに生き、互いに対して語りかけ、挨拶で握手の手を差し出し、愛や反感、信念と行動、語りかけと応答において関係しあっているならば、われわれはいつでも人格主義的態度にある」(W. I. 183)。私がそのような態度を取って世界と関わるとき、世界は「私にとっての世界」としての周囲世界(Umwelt)になる。この周囲世界の主観は、心理物理的実在としてではなく、人格(Person)として捉えられる。例えば、自然主義的態度とは対照的に、私が周囲世界に見出す人間は、(高次の生理学的対象として語るならば)タンパク質で合成された、すなわち自然として人間ではなく、まさに私の親友や掛け替えのない肉親などの存在なのである。

(18) だからと言って、自然科学的な意識へのアプローチが、全く無意味だとか誤りであると主張したいわけではない。むしろ自然科学、内世界的(ムンダーン)な現象学、超越論的現象学との緊張関係こそが考察されなければならないだろう。

(19) 人格主義的態度にある身体分析の可能性は、人類学や社会学における身体論に積極的に見出されると思われる。たとえば、大沢真幸『電子メディア論 身体の変容』一九九五年、新曜社、菅原和孝『身体的人类学』河出書房新社一九九三年などを参照。それと同時にそのような学の成果をもう一度現象学的に取り上げることが必要であろう。